

「筑豊」という「場所」から考える、都市伝説「犬鳴村」のイメージ生成について

鳥飼, かおる
九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1932037>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 33, pp.175-190, 2018-03-15. 九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン :
権利関係 :



【研究ノート】「筑豊」という「場所」から考える、 都市伝説「犬鳴村」のイメージ生成について

鳥飼 かおる

1. 犬鳴村のうわさは

本論で取り上げる犬鳴村いぬなきむらの都市伝説とは、日本のインターネット黎明期の一九九〇年代末期から二〇〇〇年初頭にかけて、主に匿名巨大掲示板『2ちゃんねる』の「オカルト板」で語られ始め、現在に至っているものです。その内容としては、福岡市域とかつての筑豊炭坑地帯のひとつであった直方市のほぼ中間に位置し、福津市、宮若市、古賀市、糟屋郡新宮町、同久山町の三市二町にまたがる犬鳴山系の南側にある、およそ五八四mの犬鳴山いぬなきやま（渡部、二〇一二、三七頁）の中に「犬鳴村」という村がある。その村の入り口には、「この先、日本国憲法は通じません」という看板が立てられている。村人たちは外部との接触を一切断ち、自給自足の生活をしている。興味本位で村を訪ねた人々を襲う（犬鳴峠、一九九九）。それゆえ絶対、近寄ってはならない、というものです。

言うまでもなく、これらは全く事実無根の話です。確かにかつて「犬鳴村」そのものは実在しましたが、一九八六（昭和六一）年のダム建設

によって、ダムの底に沈んでいます（福岡県教育委員会、一九九〇、二〇六頁）。ですが、あたかも真実であるかのように、現在もなお、語り続けられています。

犬鳴村の都市伝説は言うまでもなく、日本においては何か大きな事件が発生してから、後追いの形でしか法的規制が行われない現状です。そのため、匿名で何でも自由に発言できるインターネット上の様々な表現空間においては、悪意に満ちた誹謗中傷の文言が溢れている格好です。¹⁾

2. インターネット上で語られる怪異譚について

日本の口承文芸研究者・大島廣志（二〇一七）は、「〈怪異〉の書き取り方」に関する論考の中で、二〇世紀末から、インターネットの中で話が展開する状況を論じています。例えば、日本人が誘拐され、外国で手足のない「日本だるま」という見世物になっていたという「日本だるま」。そして暴行されて死んだ「橘あゆみ」の恋人が犯人探しをし、「二四時間

以内にこのメールを七人に回せ、メールを止めたら殺す」という、見ず知らずの人に日々拡散され続けるチェーンメール、「橘あゆみの話」などです。しかもこれらは旧来の「口承」の「場」を経ていない創作話や引用話となっているところが、インターネット怪文書の「書き取り方」の特色（大島、二〇一七、一七一一―一七二頁）と結論づけていました。

そして、編集者・ライターの広坂朋信（二〇一六）は「心霊スポット」の定義、そしてそこを訪れる人々を民俗学的視野で分析する中、「心霊スポット」の衰退の危機²を述べています。その衰退の要因のひとつとして、実際に足を運ぶことができ、目で見て、体感できる「場所」ではなく、インターネット上で話題になっている「新名所」の存在があるといいます。つまりそれは「杉沢村」、本論で取り上げている「犬鳴村」、そして「きさらぎ駅」の三箇所です。

「杉沢村」は二〇〇〇（平成一二）年に初めて、テレビ番組で取り上げられた都市伝説です。内容としては、戦時中のある時期、青森県の杉沢村で村民が皆殺しになる事件が起こった。社会不安を恐れた政府によって村は廃村となり、行政の記録や地図からも抹消された。しかし時を経て、その跡地に迷い込んだ人々が行方不明になったり、殺されたりするというものです。これは横溝正史の推理小説『八つ墓村』（一九七二）のモデルとなった、一九三八（昭和一三）年に実際に岡山県の農村で起こった「津山三〇人殺人事件」の焼き直しであると考えられるということです。そして広坂は、福岡県の「犬鳴村」はこの「杉沢村」からの連想でつくられたものだと指摘しています。

最後の「きさらぎ駅」は、二〇〇四（平成一六）年に『2ちゃんねる』に書き込まれた投稿が元になって生まれたものだと言います。それは、

「はすみ」と名乗る人物が静岡県の新浜松駅で私鉄に乗り換えて帰宅する途中、聞いたことも見たこともない「きさらぎ駅」で下車し、次々と不可解な出来事に遭遇し、ついには消息不明になるというものです。これもまた、元型となった「杉沢村」が「地図から消された村」だったことから派生したものと結論づけています。

これらの「新名所」に共通するものとして広坂は、具体的な地名や駅名が明示されているにもかかわらず、「地図にない村」「今はない村」「路線図にない駅」であることが強調される点を挙げています。それゆえ、これらの都市伝説の受容者たちは、かつては青年の通過儀礼、現代であれば予定調和の「怖さ」を提供する「お化け屋敷」や「ホラーアトラクション」とは異なる、ある意味無料で、しかし必ずしも「怖いもの」が現れて、「怖がらせてくれる」保証がない「肝試し」や、「文学散歩」「歴史散歩」「聖地巡礼」³の亜流としての「心霊スポット探訪」における「場所」が「どんなもの」であったかを体験することを楽しむわけではなく、その「場所」を探し出すことに向けられている。その結果、現実の「心霊スポット」が衰退している（広坂、二〇一六、二一八―二一九頁）とまとめています。

広坂の指摘は、昨今のインターネット社会、そしてそれが「当たり前」のもの⁴として育った若者世代のありようを如実に表していると言えるでしょう。確かに都市伝説受容者は、ネットの記事を閲覧したり、さらに自分の見解を書き込んだりして「楽しむ」ばかりではなく、実際にその「場所」を訪れ、自身のブログに「探訪記」を書き記しているばかりではなく、YouTubeでの「生中継」、Twitter、Facebook、InstagramなどのSNSにおいて、写真や動画をアップロードしている人も少なくあり

ません。⁽⁴⁾

しかしインターネットが興隆するはるか以前から、「邪馬台国は〇〇にあった」「武田信玄の隠し金」「徳川埋蔵金」「フィリピンの山下財宝」「M資金」……など、「杉沢村」「犬鳴村」「きさらぎ駅」とは語られている内容や意味合い、歴史・文化的背景は全く異なるものの、その「伝説」を信じ、秘蔵された貴重な遺物を夢見て、「場所」や「ありか」を探し出そうとする「トレジャーハンティング」の気運は多く存在しました。犬鳴村に関して言えば、「若者世代」によるインターネット世界限定ではなく、書籍でも紹介されてきました。⁽⁵⁾それゆえ、「今はネット社会だから」などといった「一元化」は、ある意味犬鳴村などの「都市伝説」に対して、「特殊なもの」「異常なもの」と、インターネットの情報に惑わされることのない「まとも」な価値観・倫理観を持つと自負する「正当」な立場の人々による「周縁化」「境界線化」が行われてしまっています。その結果、「語られる」「書き込まれる」内容が、スマイリーキクチへの誹謗中傷のように、より陰湿かつ過激なものになってしまう危険性があると言えるでしょう。

3. 犬鳴村のうわさを検証する

筆者は犬鳴村の都市伝説を究明するために、地理学者エドワード・レルフの「生きられた世界の一つの現象」である「場所 place」（レルフ、一九九九、一九頁）をふまえ、二〇一四（平成二六）年には、犬鳴峠を超えたところに位置した筑豊炭田興隆期に類発していた、炭坑夫らの「ケツ割り（逃亡）」との関連性を論じました（鳥飼、二〇一四、一六七―一

七六頁）。二〇一五（平成二七）年には、同じく犬鳴山からほど近く、中世期における山岳信仰の「場所」だった首羅山（白山）と犬鳴山の対比を試みました（鳥飼、二〇一五、八七―一〇二頁）。二〇一六（平成二八）年には、江戸期に短期間ですが、犬鳴山中に存在した「たたら場」を取り上げ、宮崎駿の人気アニメーション『もののけ姫』（一九九七）などに見る、「たたら民」「山の民」のありようを論考しました（鳥飼、二〇一六、八一―九〇頁）。

そうした中、筆者は二〇一四（平成二六）年二月に、心霊スポット探訪サイト『心霊スポット朱い塚——あかいつか』（<http://scary.jp/>）運営者より、以下二枚、二〇〇〇（平成一二）年か二〇〇一（平成二三）年に「現場」で撮影した写真を提供されました。運営者によりますと、一九七〇〜八〇（昭和四五〜五五）年代にブームであった暴走族など、地域の不良少年たちが夜中に騒いで花火をしたり、喧嘩をしたりすることに苦慮した、犬鳴山中で農業を営んでいた数世帯の住民のうちのひとり、彼らを追い払うため、これらの立て札を立てていたということでした。

犬鳴村の都市伝説において鍵となる、「日本国憲法が通じません」の立て札と、『朱い塚』の運営者が二〇〇〇年代



『心霊スポット朱い塚——あかいつか』運営者提供（2000年か、2001年に撮影）

初頭に撮影したものと同じものだったかは、今となつては確かめようがありません。しかし、立て札を立てた人の意図・目的を外れ、二〇一四年当時であれば、「日本国憲法が通じません」という文言から類推される、「隔離」された、反体制・無政府主義的な「イメージ」を持たれている「左翼の人」^⑥、そして「我々の安寧を脅かす存在」として、日本国内において長らく差別と偏見のまなざしを向けられていた「ハンセン病、頭のおかしい人」（呪われた都市伝説、犬鳴村 前編二、二〇一四）によって立てられた。しかも、その立て札の言葉は法治国家の日本の中でも例外的に、「警察が」入れない力」によって遵守されているとみなされてきました。二〇一六年には、「銃痕」「近親相姦」、「ナタを持った男」と、話は更に拡大・発展しています（濱、二〇一六、一三七―一三八頁）。それは何らかの「根拠」があつてデマが発生するのではなく、スマイリーキクチへの誹謗中傷の根拠とされる、「犯罪を犯した少年グループと同世代の足立区出身者」などに見られるように、それらが持つ何らかの「くすぶり」、すなわち負のイメージを「正当化」するために、「根拠」と称するものを引っ張り出し、まことしやかに語り、それを開陳している状況と変わりがありません。しかもそれはたまたま、「インターネット上」であるだけで、「パソコン」「スマートフォン」を全く使わない、ゆえに「インターネット」にも一切触れたことがない人は、デマを信じて流布したり、デマを大げさなものにしたりするような行為を一切行わないというわけではありません。誰でもが悪意なく、行い得る振る舞いなのです。

4. 犬鳴村の都市伝説が表象するもの

必ずしも都市伝説における「犬鳴村」の「描かれ方」、「語られ方」に強い影響を与えたとは断言できませんが、「日本国憲法が通じない民が住む」とされる犬鳴村は「犬鳴山」の山中に存在するとされています。それを踏まえ、以下、「山の民」、そして「筑豊」のイメージと「犬鳴村」について考察します。

4・1. 山の民について

民俗学者の柳田國男は「山の民」こと、「山人」という言葉について、一九一〇（明治四三）年に讀売新聞紙上で論じた「山人の研究」の中で、古くから「荒ぶる神」^⑦、「仙人」、「天狗」、「山に居る住民」として使われて来たが、「本当の日本語としては、我々社会以外の住民、すなわち、吾々と異なった生活をして居る民族」のことで、「人類」を意味し、「日本人の生活して居る部落から、隔絶した山中に住んで居る異民という意味であつた」（柳田・大塚、二〇一三、九八―九九頁）と述べています。そうした山人について柳田は、『山の人生』において（一九二六／一九七六、二〇四―二一九頁）、以下の例を挙げています。

1. 寺島良安によって一七二二（正徳二）年に出版された、日本初の国説百科辞書『和漢三才圖會』において、筑前（現・福岡市域を含む、福岡県北西部）では「山獠」と呼ばれていた「山の民」は、「容貌十歳ばかりの童子の如し。遍身細毛あり。柿褐色にして長き髪面を蔽ひ、肚短く脚長く、立行して人言を為し、早口なり。杣

人〔木こりのこと、〕内は筆者による補足、以下同〕と互に相怖れず。飯糰物あれば喜びて之を食ひ、木を斫る用を助く。力甚だ強し。若し之に敵すれば即ち大に害を為す〔寺島・和漢三才圖會刊行委員会、一九七〇、四六〇頁〕。

2.

一八〇六（文化三）年に昌東舎真風が著した『諸国奇談漫遊記』に記された「山男」は、「豊前中津領〔現・大分県中津市〕の山賤など、奥山より木を伐出す時、馬牛の通ひ難き場所は山男と云ふ者に頼みて山の口まで之を出す：（略）：山男は大抵長六尺、高きは六尺四五才もあるべし。力量至つて強き者なり。材木を負せて出すに、一向人と言語を為さず、唯此方の言ふことは聞分ると見えたり。此木を山口の何と云ふ処まで出してくれよ、其賃には此握飯を遣すべしと約束す。又もし此木二本持たば二つ遣ふと言へば、其側に寄り木を持試み、二本持たる、と思へば之を傍へよせて二本一所の由を示すなり。足は至つて遅し。総身人と同じくして毛多し。尤も裸なり。下帯とても為し。男女しるしはあれども股のあたりは殊に毛深く、眼の色と大小にて男女を別つばかりなり。甚だ正直なる者にて、約に違へば大に怒り大木なりとも之を微塵と為し、且つ其人を忘れず重ねて逢ふことあれば無二無三に飛掛りて半死半生に為す也。そは握飯二つと言ひて一つ遣しなどしける折のことなり。此様子蝦夷人に似たりと謂ふべきか。山中往來の場処限ありと見えて、其処よりは少しも里へ出でず。又岩角谷川やうの所にてもゆたりゆたりと歩む。川深ければ牛の如く頭の隠る、川にても底をば平地の如く歩み行くなり。男は大抵肥えて色青黒し。又山女は木葉樹皮ていの物を割きて筵の如く編

綴り、それを身に纏ふなり。色は青白く丈も男よりも少し低く瘦せたる方なり。是は一寸は人の眼に係れど中々傍へは寄来らず。如何やうの場処に住み居るや知る者無し。獵人などたまたま深山の岩窟に眠りて居るを見ることありと云ふ。国により住む国と住まぬ国とあるにや、はた山によるにや知れ難し。仙人などとは様子異なるものなり。平生は何を食糧と為すかと思ふに、多く木実又は鳥獸それぞれの得物を求め生物を食す。或は其皮を着もし、敷きもすると見えたり。又藤葛を裂きて糸の如くし用ゐることあり。齒は男女とも至つて白し。されども甚だ穢しき臭気ある由なし」（昌東舎、一八〇六、一三一―一八頁）。

このように、「文明化」されている、「教育」を受けている「我々」対、「そうではない人々」との「違い」が記録され、「比較」「分析」「議論」されることは、決して珍しいことではありません。

また、「山人」であつても、「山窩」と呼ばれる「一世紀ほど前の諸新聞に犯罪者の集団として報道されている」人々と、「ほんの何十年か前まで各地の村落社会を回遊していた職能民の集団」としての「サンカ」との間にどのような関係があつたのかを研究してきた筒井功（二〇〇八、一〇頁）は、柳田が一九一二（明治四五）年に『人類学雑誌』の中で発表した、『イタカ』及び『サンカ』内の、「サンカはよく搔払を為す、自分も幼少の折に四つ身の着物を乞食に持ち行かれたることあり。一里ばかり追掛けて捕へたるに五十余の女サンカなりき。かゝる例は郷里にて屢々之を聞けり。其他山の物田畑の物にても、入用の都度之を取るを意とせず。然れども此等の侵害の多くは、財貨に対する觀念の相違に基

づくものとも云ふべく、大体より云へば此部類と我々との関係は平穩なる交通なり。只彼等の間に於て犯罪の歩合稍々多きが故に余分の警戒を為す必要あるのみ」(柳田、一九八九、二二頁)と述べた「サンカ」と、「定住社会とのあいだの平和的な交渉によつて生を営む職能民」である「サンカ」を含む「サンカ観」は、柳田以後の研究者・観察者に無前提で受け継がれ、第二次世界大戦以降は、この理解一色の感がある(筒井、二〇〇八、九頁)と指摘しました。

更に筒井は、柳田らと反対の立場を取る山窩調査者・鷹野弥三郎や当時の新聞報道との比較を試みています。鷹野は「彼等山窩の性質は、一見人を恐れる如くであるが、其の一面には虚構が巧みで、且精悍悍猛で、人を人とも思わぬような異常的、驚異的の通性を有している。普通竊盜せつとうに入つて家人に見えられた時は、逃げ応じられるだけ逃げんとするのである…(略)…然るに逃げ応じられない、之は不利であると思うと、直に常にその心内に潜んでいる精悍な残忍な潜在性を爆発してその特有の異常性格を遺憾なく發揮する。そうして懷中か、又は袂に隠し持つて居る例の鋭利な両刃物はちのを逆手に揮ふるつて斬つてかゝつて来る。此の時彼等には自己を護るの急にして人を殺す如きは意にも介していない」(鷹野、一九九三、七〇―七二頁)と記していました。

筒井は、これらの比較をふまえ、犯罪集団として「語られてきた」、「サンカ」と、山を拠点にしつつも、そこに根づかず諸国を放浪する職能民としての「サンカ」に関し、「今日『サンカ』の名で総称している人びとは…(略)…決して均質な集団ではなかった。地方ごとに、その生業にも生態にも大きな差があった。むしろ全国に号令するような大親分おやふなど、いるはずもない。同一の掟や不文律も存在しなかった…(略)…し

かし(「サンカには」)重要な共通点があった。すなわち、中核にいた者は代々の無籍者であり、だいたい文盲であり、その日常には非定住性、漂泊性が強かった。生業はさまざまとはいえ、原則的には特定の細工と、その製品の行商、川魚漁(ナマズやコイ、ウグイ、オイカワ、フナなどの雑魚は、ある時代の日本では素人でもいくらでも捕れたから、商品価値は高くなかった)、門付け芸ないしは大道芸、物乞いなどのうちの複数を兼ねていた。そういうことは普通の農民、漁民、勤め人などには決して見られない。彼らは今日のホームレスとも全く違っていた。家族がいたし、習得に長い年月を要する技術をもっていた」(筒井、二〇〇八、二三四頁)と述べつつ、「両者は同じコインの裏表のようなものではないか。たとえそうでなくても、大部分は重複していたのではないか」(筒井、二〇〇八、一六四頁)と結論づけています。

4・2. 「筑豊」のイメージ…「どろぼう部落」

以上述べた明治・大正期の「山窩」¹³、或いは実際のところは「山窩」の末裔であると判然としないにもかかわらず、「山窩」の末裔として「語られてきた」、「山窩」的な人々の「生活様式」¹⁴が、戦前はおろか、戦後にも展開していた事例として、「筑豊のどろぼう部落」があります。

一九七〇(昭和四五)年当時の「どろぼう部落」は、「福岡市から特急バスにゆられて一時間半。急な山道を二つ越え、目の下にモヤに包まれた里が開ける。かつて黒ダイヤと呼ばれた石炭の宝庫であり活況を呈したここ筑豊地帯は、とうにヤマを閉ざし、見る影もないさびれようである。ふもとは背たけを越す雑草がおい茂り、風雨にさらされて不気味に崩れ落ちたボタ山が荒涼と点在する。まるで恐竜が伏せたような、

高さ数十mのボタ山とボタ山に挟まれた狭い地峡を、遠賀川の支流がうねる…(略)…その川沿いにへばりつくように、みすばらしい家並みがあった。川のへりに出来た段丘の陰に約二〇戸、段丘の上には、朽ち果てんばかりの古い炭住が軒を並べている。これは一むね五戸のむね割り長屋。十数年前、炭鉱が閉山されて放置されたところに住みついたものだ。炭住組の三〇戸余りと下の二〇戸を合わせた小さな集落(加藤、一九七二、一八一―一九頁)でした。こうした「風景」は、一九四五(昭和二〇)年ぐらいから、石炭から石油へとエネルギー革命が始まり、石炭価格が暴落し始めたこと、そして一九五三(昭和二八)と一九五九―一九六〇(昭和三四―三五)年の、福岡県と熊本県にまたがる大牟田市の三井三池炭鉱における、「総資本対総労働」と呼ばれた戦後最大の労働争議の勃発、更には一九六二(昭和三七)年に始まった石炭調査団による「スクラップ・アンド・ビルド政策」が取られ、筑豊を含む日本全国の炭鉱地帯に多くの失業者があふれた(鳥飼、二〇一五、八九―九〇頁)状況などから、決して珍しいことではありませんでした。しかし「ここ」は、大泥棒団「藤ヶ瀬グループ」の首領・瀬川徳次郎の本拠地¹⁵でした。彼は、「一九七一(昭和四六)年四月、一味一二名を従え、レンタカーで日本列島万引行の途中、青森で逮捕される…(略)…伝承によればこの部落は明治末に大分より移り住んだ山の民で、大正期にスリの集団となり、徳次郎も少年時より技を磨いて成金どもの懷中をかすめた。やがて昭和、消費の殿堂・デパートの発達に伴い、女性もまじえた万引団に移行。主に高級反物を調達した。一九五九(昭和三四)年東京・三越での集団万引以来、全国的な注目をあびる。九州との往来に空路をもちいたことから、空飛ぶ万引団、などとも呼ばれた。再々の手入れには、相互

扶助体制で堅固に維持し、部落一八〇戸のうちスリ万引の前歴者一二三名、前科合計三一〇犯、年商二億円といわれた」(小沢、一九八〇、二五七―二五八頁)ということです。

こうした瀬川徳次郎率いる「どろぼう部落」のあり方について、例えばポライターの井出孫六は「(彼らの)父祖は、大分県¹⁶の山奥で、籐^{とう}を採取して箕^みを編み、里に下つてはこれを商つて米塩を得ていたという…(略)…(明治における山林の国有化、戸籍調べや学制というしめつけに加え)、明治二〇年代(一八八七)」の筑豊の石炭ラッシュ、籐細工は坑内用具の需要をそこに見いだした。箕師にとって財産は指先にあつたから、たとえ身すぎ世すぎに不如意でも、坑夫となつて坑道をはいずりまわり手先をだいなしにすることだけはきびしく慎んだ。それはいわば箕師たちの矜持であり、鉄則であつたから、筑豊の一部に居を定めながら、たとえ石炭ブームに直方、田川、飯塚の町々が酔い痴れたときでも、それを横目に見ながら彼らは節をかく持ったのだ…(略)…「しかし、石炭運搬が『セナ』と呼ばれるザルから、広げられた坑道に」トロッコが現われた時、藤ヶ瀬におり下つてきた山の民の生業には深刻な打撃が及ぶ…(略)…風のたよりに東京で、仕立屋銀次、鼈甲勝、湯島の吉といった英雄が活躍しているというニュース(を知った)…(略)…彼らの指先が微妙な動きを示しはじめたのは、このころからだと推定される」(井出、一九七六、一七四―一七五頁)。「山の民が本来、人類の所業たる犯罪をかき抱いて遥かなる耶馬溪の彼方から英彦山をこえて下つてきたわけでない…(略)…彼らには、あくなき貨幣経済の汚濁に対する免疫はなく、聖徳太子ももちあわせず、箕を編む籐を小脇にかかえているばかりであつた。むろん生産材たる籐は彼らの単純な労働によって簡単に

手に入れることが可能であった⁽¹⁸⁾（略）：彼らの駅前にくりひろげられた山師たちの、いかがわしい金銭というものを媒介にした黒ダイヤの乱獲、奪奪のそのあくなき所業が、彼らに触発したものはなんであったか。山師たちはいかがわしき資本を奇術のごとくあやつって、ほしのまま黒ダイヤを運びさつていく。資本をあやつる強者たち、彼らに対して弱者たる山の民は…（略）：黒ダイヤなど関心はない。強者たちのあやつる懷に向けて弱者のパンチはストレートにのびてゆく」（井出、一九七六、一九〇頁）と、「搾取る資本家」対「搾取される弱者」の社会構造に当てはめ、「どろぼう部落」の人々に深いシンパシーを寄せています。

また、「どろぼう部落」をモデルにしたサスペンス小説『白昼堂々』（一九六六年）を著した結城昌治は、彼らの大胆かつドラマティックな「万引の手法」⁽¹⁹⁾が読者に大きな反響を呼んだこともあって、一九七四（昭和四九）年に書籍化された際、「現実の万引団はその後にも活躍している模様で、北九州の新聞社から『捕まった本人が、白昼堂々のモデルだと言っているが本当か』という問合せがあったり、それと似たような問合せが再三におよんだ」（結城、二〇〇八、三四一頁）と述べていました。

4・3. 「筑豊」のイメージ…「アリラン峠」

また「犬鳴村」を擁する犬鳴山は、福岡市域とかつての筑豊炭田地域を間で「つなぐ」場所であるばかりではありません。「農作業を主としていますが、（犬鳴山中を水源とする）犬鳴川下流の石炭産業との共存共栄は、忘れてはならない歴史の一コマでもあります」（宝部、二〇〇五、一頁）。すなわち、犬鳴山から北東に位置する山口には、山口炭坑と呼ばれる、一九三二（昭和六）年頃から一九四〇（昭和一五）年まで採掘を行

なっていた、小規模な炭坑が存在しました。そこでは手作業で選炭が行なわれ、ボタは選炭場の近くに高く積み、石炭は宗像の炭坑へ馬車で運ばれていました。従業員多くは家族連れで、周辺に建てられた宿舍に住み、子どもは近在の小学校に通っていたのです。本来、長期的な展望で採炭を始めたものの、程なく閉坑してしまいました。その後は坑口も土砂で埋まり、宿舍や選炭場跡は畑や水田となり、当時の面影は全くありません。若宮町全体の地質や地層⁽²⁰⁾からは、石炭とは関係ないように見えますが、犬鳴山周辺もまた、筑豊地区の旧産炭地の一町村といわなければならぬ（田中、二〇〇五、三二頁）ということです。

そこで以下、筑豊に根づいて、聞き取り調査を行った、記録作家・林えいだいの「アリラン峠」の記述を振り返ります。

筑豊の炭鉱地帯には、いくつもの地獄谷と呼ばれるところがある。そうした地獄谷には、きまってアリラン部落がある。大正時代に集中して渡航して、炭鉱の周辺に住みついたものか、あるいは解放後に炭鉱から追い出されて、帰国もできずにいた朝鮮人が集まり、スラム化したものである。

私が住む福岡県田川郡香春町のすぐ隣の田川市にも地獄谷と呼ばれるところがあり、アリラン部落とその近くにアリラン峠がある。もちろん約二八カ所のアリラン峠は、筑豊の地図には載っていない（林、一九九四、五二頁）。

アリラン峠は、やはりアリラン部落の近くにあるが、必ず朝鮮人

寮の跡地の横にある。

殆どの朝鮮人寮は、高い板塀と鉄条網に囲まれ、外勤労務係に監視されて、まるで奴隷のように坑口へと向かった。一日二交代の一二時間労働を終えて、くたくたに疲れて足を引きずって峠を登った。わが身の悲運を嘆きながら、誰となく唸るようにアリランの歌を歌い故郷のことを思った。

アリラン部落もアリラン峠も、朝鮮人にとっては異国に残した悲しみの記憶である。日本全国いたるところに、アリラン峠があるのも不思議ではない（林、一九九四、二七九―二八〇頁）。

同様に、上野英信と元坑夫で社会派の写真家・趙根在との共著『写真万葉録 筑豊八アリラン峠』（一九八六）には、写真家の裴昭が撮影した「日向峠」の写真が掲載されています。⁽²¹⁾ その写真に添えられたキャプションには、「一九八三年一月一日、日向峠の朝鮮人坑夫墓。切り取られた古河大峰炭鉱のボタ山の片隅に、ずり落ちそうな格好で二〇墓ほど、同胞の墓が点在していた。あまりにも寂しく、私は撮影がおわると、深く頭を垂れ、その場を離れた」（上野・趙、一九八六、一三頁）。

古河大峰炭鉱は、かつて田川郡大任町に存在しましたが、ここで言う「日向峠」は福岡県西部・糸島市の「日向峠」とは異なります。林が述べていたように、確かに「筑豊」の地図の中には存在しません。筑豊炭田近辺の峠を拾いますと、犬鳴峠の他に、冷水峠（筑紫野市）・八木山峠（飯塚市）・烏尾峠（田川郡糸田町）・シヨウケ越（飯塚市）・山田峠（遠賀郡遠賀町）・戸立峠（田川郡添田町）・垂見峠（遠賀郡岡垣町）・猫峠（宮若市）・七曲峠（京都郡みやこ町）・京都峠（京都郡苅田町）・米ノ山

峠（飯塚市）・大藪峠（田川郡添田町）・百谷峠（嘉麻市）・見坂峠（宮若市）・仲哀峠（田川郡香春町）・鉦立峠（京都郡みやこ町）・旧八丁越（嘉麻市）・赤木峠（宮若市）・味見峠（田川郡香春町）・嘉麻峠（朝倉郡東峰村）・芝峠（朝倉郡東峰村）の二三峠を数えます。「筑豊」には、先に挙げた「地図に載っている」峠以外の峠で「アリラン峠」が二八ヶ所あるといいますが、林は具体的な地名、或いは「場所」を特定できる形で記載していません。しかし、「田川郡香春町」以外の「場所」に関する明確な記述がないことから、「筑豊」という「場所」のどこかに、「地図に載っていないアリラン峠」がある。そしてそれは「筑豊」または「福岡」とどまらず、「日本全国いたるところに、アリラン峠がある」と「文学的」「激情的」に締めくくることが、皮肉にも、「筑豊」という「場所」のイメージ形成に大いに「貢献」してしまふのです。引いてはそれが、都市伝説における「犬鳴村」の「特徴」「様子」に関するイメージ・ションを大いに刺激した／することになるのではないのでしょうか。しかもそれは、「朝鮮人強制連行」を「糺す」立場を取ってきた林、そしてサークル村を主催し、「筑豊のヤマ入」の詳細を記録した上野、そして社会派の写真家の趙や裴の本意ではないと筆者は考えます。

5. まとめ

以上「山の民」、「筑豊」を通して論じてきたことが都市伝説「犬鳴村」のイメージ形成の全容を物語るものではないことは言うまでもありません。しかし、例えば筑豊の「どろぼう部落」の人々に対して、「あいつらはオイラとは人種がちがうトバイ」「ちがうんだ」（井出、一九七六、一

七四頁）と見つめた「まなざし」は、対象が「どろぼう部落」の人々、そして実在しない、「日本国憲法が通じない」「犬鳴村」の人々に対するものも、同質の好奇心、そして忌避、蔑視を内包する点においては変わらないでしょう。むしろ、「筑豊」という「場所」が有した歴史や文化が「後追い講釈」的に付与されているだけです。そうした意味においては、林えいだいが言う「アリラン峠」ならぬ、「犬鳴村」は「日本全国」または「ネット上の世界」のいたるところに存在し、拡大し続けることでしょう。

筆者には、何らかの政治思想的メッセージを発信したり、差別を喚起すること、またはセンセーショナルなうわさをつくり、それを世間に流布させる意図は全くありません。しかし、それを受け取る側の意思や思想信条は「人それぞれ」です。スマイリーキクチへの誹謗中傷の事例を見るまでもなく、筆者の論考をもつて、「犬鳴村」の都市伝説が膨張・発展・拡大する危険性もあります。そのスピードや内容の「充実度」は、「日本国憲法が通じない」、「治外法権の「場所」に住む「犬鳴村」の住民たちの「極悪非道」ぶりよりも、「恐ろしい」ものと言えるでしょう。

フローニンゲン州文書館長、オランダ国立文書館長、アムステルダム大学メディア学部アーカイブズ学教授を歴任したエリック・ケテラール（二〇一二）は、「現代のアーカイブズ学では、アーカイブズ文書を単なる情報対象としてではなく、コミュニケーション・プロセスの構成要素として扱う。レコードは証拠であるだけではなく、自らコミュニケーションをし、そのコミュニケーションを通じてパフォーマティヴ・パワーを持ち、何かを成し遂げ、その前後で状態を変化させる」（ケテラール、二〇一二、一六頁）と述べています。「犬鳴村」の都市伝説は、一般のアーカイブズ学や博物館・図書館・文書館などで扱う、地域の習俗・民話・

方言・文化・歴史・行政・経済・学校教育・社会福祉などに関する資料や、天候・戦争や地震などの「重要」な記録とは異なり、「キワモノ」「トンデモ」のレッテルを貼られ、真つ先に「廃棄処分」されるべきものとして取り扱われがちな言説です。しかし必ずしも「社会に役立つ」ものでなくとも、日本国内において二〇世紀末に始まり、今日に至っている「インターネット文化」のひとつでもある「犬鳴村」の様々な言説は、ケテラールが言うように、「自らコミュニケーションをし、そのコミュニケーションを通じてパフォーマティヴ・パワーを持ち、何かを成し遂げ、その前後で状態を変化させる」ものであることは間違いないでしょう。ネガティヴなイメージを帯びた「うわさ」や「都市伝説」をつくり出し、それを見聞きすること、ネット上で一言何か自分の意見を「物申した」後、第三者にまことしやかに言いふらすことを好むものの、ひとたび真実が開示され、正当な手段による弾劾や法的措置が取られると、一気に収束し、何事もなかったように振舞う。しかも悪意ある「うわさ」や「都市伝説」を広めた張本人であっても、「他人の言葉に責任を押しつける」が、「自分の言葉には責任を持たない」（スマイリーキクチ、二〇一一／二〇一四、一八〇頁）。これら一連の態度は、人間が犯す「罪」で、決してあつてはならないことです。しかしそれは逆に、人を激しく「鼓舞」し、活気づける側面をも有します。そのような人間の「醜い」、そして「弱い」様相をも次世代に語り継ぐために、私は「犬鳴村」の都市伝説が何を意味し、表象するものかを、今後も更に深く検証すべき問題だと考えます。

（攔筆にあたり、九州大学・三輪宗弘先生、立教大学名誉教授・野田研一先生、

福岡県立大学名誉教授・森山沾一先生、跡見女子大学・横山太郎先生、直方市石炭記念館・八尋孝司館長、『心霊スポット 朱い塚——あかいつか——』(<http://scary.jp/>)「朱い塚」氏、『鶴嘴さんのブログ』(<https://ameblo.jp/gngwmd0/>)「鶴嘴」氏、A&D KOREA Limited 李源培氏に多大な御指導、御鞭撻を賜りましたことに、深謝の意を表します)

注

- (1) その典型的な事例に、スマイリーキクチ誹謗中傷事件がある。それはタレントのスマイリーキクチが、一九九九(平成一二)年からおよそ一〇年間、インターネット上で一九八八(昭和六三)年一〜一九八九(昭和六四)年一月の間に彼の出身地である東京都足立区内で起こった、少年グループによる女子高生コンクリート詰め殺人事件の犯人の一人とされ、誹謗中傷を受け続け、逮捕者まで出た事件だ。そしてそれは、今なお継続中である。
- (2) 東京都に限って言えば、首相官邸、羽田空港の大鳥居、赤坂のホテルニュージャパン跡地、町田市鶴川のお化けマンションなど、かつての定番スポットは建て替えや移転などによって様変わりし、心霊スポットとしての説得力を失った。また、各所にあった幽霊が出るという電話ボックスも、そのほとんどが今はない。また、一九七〇年代に一世を風靡した口裂け女伝説の舞台となった、多摩ニュータウンなどの東京郊外は、若い世代は独立してよそに移り住み、依然として住んでいるのは主に高齢者となっている。そのため、「郊外」という、怪異譚につきものの「境界」の範囲を縮小してしまっていることも、新たな心霊スポットが東京に生まれにくくなったと述べている(広坂、二〇一六、二二六〜二二八頁)。
- (3) ここで言う「聖地巡礼」とは、マンガ・アニメの舞台や映画のロケ地を訪ねること(広坂、二〇一六、二二〇頁)。
- (4) 二〇一七年二月三日現在、「犬鳴村」で Google 検索したところ、約一八二〇〇件ヒットした。内容は Wikipedia、まとめサイトに加え、主に個人的な心霊系・サブカルチャー系を好むブロガーによる探訪ブログ、Youtube による実況動画が大勢を占めていた。
- (5) インターネットの「後追い」ではあるが、二〇一一年にミリオン出版から出版された『別冊「怖い噂」リアルノンフィクション』都市伝説完全ファイル・世の中に漂流する怪しいウワサの正体』内の、朝倉喬司による『犬鳴峠』恐怖伝説の真相…日本国憲法の通用しない謎の集落の正体』や二〇一六年にT〇ブックスより出版された濱幸成の『福岡の怖い話』がある。
- (6) 「左翼の人」による、「山」において、反体制・無政府主義的な「イメージ」を世間に広く形成させるに至った犯罪としては、連合赤軍による一九七二〜七三(昭和四六〜四七)年に群馬県・榛名山などを舞台とした「山岳ベース事件」、一九七二年の長野県・軽井沢での籠城事件「あさま山荘事件」がある。
- (7) 柳田によると、「荒ぶる神」は「邪神」、「悪神」または「荒神」のことだ、古い時代には神と人間の区別がはっきりしていなかったため、今日「一九一〇(明治四三)年当時」の台湾の頭目とか酋長とかいうような意味であった。しかも「荒神」は決して外国から来たものではない。彼らが社会的に勢力があるのは日本ばかりである(柳田・大塚、二〇一三、一〇〇頁)との説を唱えている。
- (8) 柳田が一九〇九(明治四二)年に自治民政の雑誌『斯民』第四篇第一号に発表した、「九州南部地方の民風」の中で、「九州の北部福岡地方は鉄と石炭が跋扈して近世的文明の淵藪^{よき}となつて居りますが、山一つ超えて南に入ると全然面目を改めて、到るところかくのごとき新開地の光景を示し、最も古き思想慣習と新開地的生存競争とが雑然として併立^{へんりつ}して居るのは一

現象であります」(柳田・大塚、二〇一三、六四―六五頁)と記しているだけで、九州の「山の民」の研究においては、主に大分・熊本・宮崎・鹿児島¹の山を調査しているが、福岡県内の山については何の記述もなしていない。しかし例えば、一九二〇(大正九)年九月八日付の『福岡日日新聞』(四頁)によると、「明治一四年(一八八一)の頃博多小金町に京都府下七本杉の生れで金子秋悦と云ふ山窩の親分が流れ込んで居たことがある、秋悦は盲目であるがなかなか奸智に長けた男で他の多くの山窩から貢物を取つてゐたそうである或時丸吉と印の入つた縁なし鍋を箱崎町に持つて出て鍋屋に同型の鍋を沢山作らせたことがあるこれは無論因州東山代の山窩に属する誓ひを立てた者に合証拠として渡すもので秋悦は九州に於る頭梁分であつたことが想像される」(全て原文ママ)など、「山窩」を含む「山の民」が「博多」という「場所」にも流入していたことが報じられていた。

(9) 例えば、「お經の有難いのは文句でさあ…(略)…人間の坊さまちや生臭さもあるし、蓄音機ならばちよほいい、(賭博)もやらねえし、女つ買へにおつ走ることもねえでさあ。それにお經を間違ふ心配もなし、お布施次第で端折つたり、脱かしたりすることもねえし、佛様も成佛疑ひなしだね」(きだ、一九四八、三八頁)など、「都会人」「教養人」の「常識」から見ると、「自分たちとは違う」「常識外れ」に映る村人たちに関して、小説家や社会学者のきだみのるが書き記した「氣違ひ部落」にまつわる著作がある。フランス・パリ大学で文化人類学者マルセル・モースの元で学んだきだ『氣違ひ部落周游紀行』(一九四八)をまとめ始めたのは、「敗戦直後から一年近く勤めていたAFP通信社を止めて(原文ママ)からだ…(略)…ぼくは都市生まれで、旧制中学時代からフランス人家庭でパリで育ち、ひとかどの文化人だと思ひ込み、内外の文化人と交遊していた。部落の暮しは始めて(原文ママ)だった」(きだ、一九六七、二五六頁)という。また、東京都下のある村を「氣違ひ部落」と名づけたのは、「讀者がこの部落を用

意に客體化出来るための便宜上の名である。私が氣違ひ部落と書く代りに愉しい村、面白い村、模範部落としても、これらの表題は、敘述の一語を改めずとも内容を裏切ることとはなかつたであらう。表題はより多く心理的パスベクチブに関係してゐるのだから」(きだ、一九四八、二一―二二頁)と述べている。そしてきだによる「部落」の定義は、「社会集団を大きな順に国、道府県、郡、村と追つて行くと、最後に行き当たる集団だ。これはこれ以上分割出来ない社会の単細胞みたいなものだ」(きだ、一九六七、九四頁)という。ある意味面白おかしく、など、「都会人」から見ると記述がある。そしてこの著作は一九五七(昭和三二)年に渋谷実監督、伊藤雄之助主演で、松竹で映画化された。

(10) 「山窩」及び「サンカ」という言葉について、筒井(二〇〇八、一八五頁)は、「サンカ」は東日本では、昔から日常用語として使われていなかったため、民俗語彙として定着しなかつた。この言葉は、もとは西日本の、近畿から中国地方にかけての特定地域で方言のように用いられていた。そこでは無籍・非定住のある種の職能民を指しており、主要な生業は川魚漁と棕櫚蓆作りであった。明治維新後、この言葉が警察部内の隠語として取り入れられる。恐らく、その方言が使用されていた地域出身の捜査関係者が持ち込んで、「各地を漂泊しながら特異な手口で凶悪犯罪を繰り返す、危険な無籍者の集団」ないしは、それに近いものを意味していた、と論じている。

(11) 山窩に関し、「記者の思い込み、偏見の反映」によつて、「明治、大正から昭和前期にかけての新聞には、文飾にはしつた大げさな記事がよく見られた」という。例として筒井(二〇〇八、二四―二六頁)は、一九一三(大正二)年八月二四―九月二三日の『報知新聞』に連載された「関東撲殺団」と題された「山窩」の記事を紹介している。八月二四日の記事によると、「教へられた道を四、五町行くと、果して堤に沿ふて二、三軒の茅屋が連つ

てゐる。神田の松の瀬掘（せぶり）とは、川べりにサンカが設置した小屋や天幕のこと。筒井によると、「フセリ」（伏せり・臥せり）の転倒隠語。セブルと動詞化する場合は、「住む」「寝る」「泊まる」などの意味になる）である。甲州一の大親分と立てられて、二百に近い身内の乾児（こかん）に手足の如く使つてゐる大頭目の住宅としては余りに惨憺たる光景である。『松親分の瀬掘は此所カナ』と訊くと、快活にハアハアと笑ひながら『今日はよく来る日だわい』といふ…（略）…兇悪無道の殺人種族の中にも、這（さす）に親分と立てられるだけあつて、松親分の眼光には物凄い光を放つ中に何処となく人を引付ける温情（あたたかみ）が籠（かこ）つて見える。随（したが）つて他の山窩の如く陰險な猜疑心にも富んでゐない」と、まさに「山窩」を「まともな」人間扱いしていない描写が散見している。

(12) 例えば「関東兄（あに）イ」こと、一府六県を荒らし回つた山窩で、主に五人組からなる「黒装束団」の首魁に、山口団蔵がいる。彼が率いた黒装束団は一九一三（明治四一）年から一九二（大正元）年までの五年間に、警察に記録されているだけで、東京府下七件、神奈川四件、埼玉五件、山梨一八件、静岡一一件、長野一件、兵庫一件、合計四七件の窃盗・強盗・殺傷強盗・強盗創傷・強姦・強盗といった犯罪を犯した（望月、一九一三、二二四―一三〇頁）。

(13) 筒井（二〇〇八、一〇七―一〇八頁）によると、「本来の山窩は、ほとんどが無籍であつた。江戸時代からずっと帳外であつた。生来の帳外は『野非人』とも称されていた。山窩は身分秩序のうえでは、野非人に属していた。これに対して穢多や抱え非人などは、人別帳の枠内にある存在であつた。ともに厳しい蔑視の対象になつていたが、戸籍の有無という点で両者は決定的に違つていた」という。

(14) 例えば、「a mのラジオ 日本の闇スペシャル 筑豊のどろぼう部落」【怪談なし】二〇一一年八月八日（二〇一一）内で、運営者のa m氏の質問

に「筑豊のどろぼう部落」に詳しいという地元在住のゲスト、「牛の皮・はぎ太郎」氏が、山下耕作監督、菅原文太主演、「実録もの」の東映映画『山口組外伝 九州進攻作戦』（一九七四）に登場する伝説的ヤクザ「夜桜銀次」を殺したのは実は自分だと語る男が自分の地元には何人もいる、と語つていた。それは「筑豊の人」に限らず、「アウトロー」に憧れ、現実的にそうであつたか否かはともかく、「昔、自分はワルだつた」と周囲に自慢する人は、昔も今も、決して珍しい存在ではない。瀬川徳次郎が万引団として活躍していた当時、今日ほど「事件」の情報伝達／受容ネットワークは発達していなかつたにせよ、「山窩」の「悪さ加減」は十分、日本国内に流布していた。従つてそれに自分を「重ねる」ことで、自分自身を「大きく」見せようとしたとしても、不思議ではない。そもそも盗癖がある／徒党を組んで「悪さ」をなすことは、その人間の出身地や生育環境、教育の程度、その人物が在つた「時代」と必ずしも連関するものではない。もともと炭坑労働者として「貧困」「無学」の中にあり、更に炭坑閉山のあおりを受けただ彼らが、たまたま、「生活のため」に、「楽」「手っ取り早い」「うまくいけば大金をせしめることができる」泥棒稼業を選んだ可能性も捨てられないからである。

(15) 「筑豊のどろぼう部落」に関しては、推理作家・結城昌治が一九六五（昭和四〇）年六月から一二月に『週刊朝日』に連載した小説、『白昼堂々』で知られる。しかもそれは松竹で、一九六八（昭和四三）年に野村芳太郎監督、渥美清主演で映画化されてもいる。

(16) 「a mのラジオ 日本の闇スペシャル 筑豊のどろぼう部落」【怪談なし】二〇一一年八月八日（二〇一一）内で、運営者のa m氏の質問に対して、ゲストのバロン氏は、『サンカ』っていうかまあ筑豊の人の流れていうのは遠賀川から流れて来た人たちとですね、大分、山から下りてきたんですよ…（略）…明治期にですね、日本の政府が山に行つて、『戸籍を持つて

ない人は山を下りなさい』と言って下ろしたんですね。で、筑豊にはそういう人は実はたくさん住んでいてですね、炭坑の人を求めるタイミンクとこれが一致していたと。遠賀川の川筋から来た人と朝鮮半島から来た人と大分の山から下りて来た人とこの三つがミックスして、更にそこに社会主義の人が入って来てですね、非常にややこしいことになっている」と語っている。また、ゲストの「牛の皮・はぎ太郎」氏が、冗談とも本気ともつかない形で、名物の「山賊鍋」を紹介する中、猫を出汁に使っているのかというam氏の問いに対して、「ま、猫だったらもつとおいしいでしょう」、「猫を食べたことがあるのか」という問いには、「ええ、あります」と答えるなど、「独特の文化」を紹介していた。

(17) 井出は一九七一（昭和四六）年一月に行なわれた浦和地裁での裁判記録の中で、瀬川徳次郎が「大分市勢家に生まれたとなっている」ことを挙げ、「やがて風のごとく英彦山をこえて、筑紫平野を一望しつづ、おずおずと福岡県田川郡下に移住して来る」（井出、一九七六、一六六―一六七頁）と述べている。現在の太分市勢家町は大分市の中心地域に属し、往時の「山の民」の「暮らし」を彷彿とさせる情景は全く残っていない。

(18) 柳田は一九一七（大正六）年に『郷土研究』第四巻第一号誌上の「山人外伝資料」の中で、「山人の国は次第に荒れかつ狭くなった。新来の日本民族の方では、これを開発と名づけて慶賀して居る。谿に棧橋を通じ嶺に切通しを作って馬も荷車も自在に来往するようになって、まだまだ深山は山人の領土であって、深夜雨雪の折は元よりのこと、必要があれば、いつでも平地人を畏嚇して逐い退けることが出来たものが、舶来の大踏鞴（おわんたら）を持って来て山の金銀を鎔（溶）す時節となつては、騒がしく眩くしてもはやその沢には生まれず、ましてやかの真黒な毒煙には非情の草木すら枯れる。さてはまた夜中も罵り走る怖ろしい鉄車がある。とてもうかうかと峰を伝うて遠国の友を訪うことは出来ぬ。山人の人口は夙くより稀少であったが、

それよりもなお淋しいのは右のごとき文明の遮断であらうと思う」（柳田・大塚、二〇一三、二二二頁）と、「山人」の詩的かつ「追われ行く者」への郷愁や哀惜の意に加え、今日の「環境問題」が明治初期に既に起こっていることを厳しく指摘している。

(19) 徳次郎らは「犯行に際して、客の注意力を他へそらすことはスリの最も基本的な技術である。油断した隙にスリ取るのだ。これが手品師なら、右手に客の注意を惹いておき、その瞬間に左手を働かせてアッと驚かせる。すなわち戦闘用語における陽動作戦という。敵の眼を欺いて虚をつく戦法」（結城、二〇〇八、二九八頁）を用いていた。つまり彼ら万引団は、最初に女が妊婦を装い、マタニティウェアをまとい、その中に反物を隠す。そして、意図的に目立つ振る舞いをする男、地味な服装の男などへ、盗品を次々とリレー式で渡していき、「現物」を持っていることを、デパート内を巡回する警備員や私服警官に見つかからないようにしていた。また盗品をさばくことができ、商品の出所に関する秘密を保持してくれる小買商を確保してもいた。その場限りで乱暴放埒な旧来の「盗人稼業」ではなく、そうした「システム」を意識的／無意識的に構築させていたことによって彼らは、「年商二億」の売り上げを上げていたのだ。

(20) 田中広によると、「九州北部一帯に広がる石炭を含む地層は、新生代の古第三紀といわれる時代に、陸上の植物が海水の影響の少ない低湿地の場所や湖沼に堆積したもので、長い年月を経て石炭となったのである。筑豊地区の石炭は、古第三紀の直方層群や大辻層群の夾炭層から採掘されたものである。しかし若宮の五反田で採掘された石炭の地層は、直方層群や大辻層群とは異なる堆積盆地でつくられたもので」（略）：直方層群より少し新しい時代の宗像層群といわれている。その宗像層群はさらに吉田層・多礼層・陵厳寺層に分類されている。山口炭坑は、多礼層の最南端の石炭の薄層を採掘したものである」（田中、二〇〇五、三一―三三頁）という。

- (21) 『写真万葉録 筑豊八アラン峠』にはタイトルの「アラン峠」にまつわる詳細な記録よりも、かつての朝鮮人坑夫の写真や、戦後の「筑豊」の様子、そして壊されゆく炭鉱跡の写真などが掲載されている。

参考文献

- 『amのラジオ 日本の闇スペシャル 筑豊のどろぼう部落』怪談なし 二〇一年八月八日 (二〇一一年) [am's occult radio] 二〇一五年九月二二日 https://www.youtube.com/watch?v=CB_mXf82zs より情報取得
- 朝倉喬司 (二〇一一年) 『犬鳴峠』恐怖伝説の真相…日本国憲法の通用しない謎の集落、の正体 田端美佐雄 (編著) 『別冊「怖い噂」リアルノンフィクション』都市伝説完全ファイル…世の中に漂流する怪しいウワサの正体 (二四一九頁) ミリオン出版
- 福岡県教育委員会 (一九九〇) 『犬鳴川治水ダム関係文化財調査報告 一…犬鳴 一福岡県鞍手郡若宮町犬鳴区の調査 福岡県文化財調査報告書』福岡県教育委員会
- 「ガソリンかけ、工員を焼き殺す…福岡で少年五人逮捕」(一九八八年二月一日) 『朝日新聞』朝刊 (三〇頁)
- 濱幸成 (二〇一六) 『福岡の怖い話』T O ブックス
- 林えいだい (一九九四) 『地図にないアラン峠 強制連行の足跡をたどる旅』明石書店
- 広坂朋信 (二〇一六) 「よみがえれ、心霊スポット」一柳廣孝 (監修) 今井秀和・大道晴香 (編) 『怪異の時空 一 怪異を歩く』(二〇一三年一二二頁) 青弓社
- 「犬鳴峠」(一九九九) 『2ちゃんねる 過去ログ』二〇一三年九月一九日 <http://www.geocities.co.jp/SiliconValley-Cupertino/6961/Log/Kowail/Inunaki.html>

より情報取得

- 「犬鳴峠 犬鳴村編」(二〇〇八) 『心霊スポット朱い塚——あかいつか——』二〇一七年九月二二日 <http://scary.jp/supot/fukuoka/inunakimura/index.php> より情報取得

- 「犬鳴村に行ってみた」(二〇〇九) 『三番煎じ 日記』二〇一五年九月二二日 <http://sanvansenji.xxxxxxx.jp/inunaki.htm> より情報取得

- 「犬鳴峠殺人 主犯格の少年に無期懲役…福岡地裁判決」(一九八九年九月四日) 『朝日新聞』夕刊 (七頁)

- 伊藤篤 (二〇〇二) 『日本の皿屋敷伝説』海鳥社

- 「国勢調査の厄介者 全国を放浪する山窩 四」(一九二〇年九月八日) 『福岡日新聞』(四頁)

- きだみのる (一九四八) 『氣違ひ部落周遊紀行』吾妻書房

- きだみのる (一九六七) 『氣違ひ部落から日本を見れば』徳間書店

- ケテラール, E. (二〇二二) 「記憶のパフォーマティヴ・パワー」(森本祥子・訳) 『学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻 研究年報』第一号 (六二二頁) 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻

- 「呪われた都市伝説 犬鳴村 前編 一」(二〇一四) 二〇一七年九月二二日 <https://www.youtube.com/watch?v=TsqKfHz-zc> より情報取得

- 望月紫峰 (一九一三) 『捜査實談 關東兄イ 一府六縣を荒したる』磯部甲陽堂

- 大島廣志 (二〇一七) 「学校の階段と都市伝説」『口承文芸研究』第四〇号 (一六七—一七二頁) 日本口承文芸学会

- 小沢信男 (一九八〇) 『犯罪紳士録』筑摩書房

- レルフ, E. (一九九九) 『場所の現象学 没場所性を超えて』(高野岳彦・阿部隆・石山美也子・訳) 筑摩書房 [原著: Relph, E. (一九七六) *Place and*

- Placelessness*. London: Pion]

- 昌東舎真風 (一八〇六) 『諸国奇談漫遊記 中』柏屋忠七・角丸屋甚助・花屋久

次郎・植村藤右衛門・大野木市兵衛

スマイリーキクチ(二〇一〇/二〇一四)『突然、僕は殺人犯にされた ネット

中傷被害を受けた一〇年間』竹書房

鷹野弥三郎(一九九三)『山窩の生活』(塩見鮮一郎・注) 明石書店

宝部義信(二〇〇五)『発刊によせて』『若宮町誌 上巻』若宮町誌編さん委員

会(編著)(二頁) 若宮町

田中広(二〇〇五)『若宮町の地質』『若宮町誌 上巻』若宮町誌編さん委員会

(編著)(一七―三五頁) 若宮町

筒井功(二〇〇八)『サンカと犯罪』現代書館

寺本良安・和漢三才圖會刊行委員会(編著)(一九七〇)『和漢三才圖會 上』

株式会社東京美術

鳥飼かおる(二〇一四)『犬鳴村のうわさ——「異界としての犬鳴」にまつわる

一考察』『異文化コミュニケーション研究論集』第一二号(一六七―一七六

頁) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科

鳥飼かおる(二〇一五)『犬鳴村のうわさ考——首羅山の「場所性」から見えてく

るもの』『異文化コミュニケーション研究論集』第一三号(八七一―一〇二

頁) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科

鳥飼かおる(二〇一六)『犬鳴村のうわさ考——「負」の自然を「仰ぎ見る行為」

としての犬鳴村のうわさ』『異文化コミュニケーション研究論集』第一四号

(八一―九〇頁) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科

上野英信・趙根在(監修)(一九八六)『写真万葉録 筑豊八アラン峠』葦書房

渡部智俱人(二〇一二)『九州の山岳』海鳥社

柳田國男(一九二六/一九七六)『遠野物語・山の人生』岩波書店

柳田國男(一九八九)『イタカ』及び『サンカ』『日本民俗文化資料集成 一

サンカとマタギ』谷川健一(編著)(一五―二九頁) 三一書房

柳田國男・大塚英志(編著)(二〇一三)『柳田國男 山人論集成』角川書店

結城昌治(二〇〇八)『白昼堂々』光文社